# 長浜☆戦国時代

鳴瀬　弓月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
長浜☆戦国時代

【Ｎコード】
Ｎ１２４７ＢＡ

【作者名】
鳴瀬　弓月

【あらすじ】
豊かな自然に恵まれた美しい小国、長浜国。この国独自の制度である“お旗女”候補の朝芽は、修行先での早春の一日、師の求めに応じて泉に向かう。そこでは一人の若き武人が、彼女の目の前で水中に身を沈めていた……。
時は室町・戦国時代。長浜国軍武将にお旗女（はため）として仕官した“私”こと少女朝芽の、恋と戦場の冒険。

※フォレストブログにて、同名夢小説形式で連載中です。

## 第一章　出会いは冷たい泉の中で（前書き）

この物語は、日本史を参考にしたフィクションです。実在の地名、歴史、人物とは関わりがございませんのでご了承ください。

# 第一章　出会いは冷たい泉の中で

（1）

つい先日まで豪雪に硬く閉ざされていた杣道(そま)が、今では柔らかな陽春の息吹に包まれていた。

枝々では小鳥がにぎやかにさえずり合い、風にはじける新芽の香りが心地よい。

深い谷間に鶯がまた、ピピピピピーッ、と鋭く啼いた。

奥山にも、春は忘れずに訪れてくれる。

長浜(ながはま)国。華正(かせい)元年、戦国時代。

山を下りればそこは修羅の業が渦巻く戦乱の巷(ちまた)。血で血を洗う人の世の荒野。しかしそれを想うには余りに平和で美しい、春の仙郷だった。

山道を上りつめると、目の前の景色が厳しく変わる。

柔らかな新緑の木々は影を潜め、代わって荒々しい山肌が深い谷間に向かって落ち込んでいる。道は細かいガレ場となって、水墨画のようにそびえたつ険峻な山々を見上げながら、青く沈む谷底目がけて続いている。目的の泉が、すぐそこにあった。

私は、手にした甕を落とさないように持ち直すと、崖の細道を注意して下りて行った。

この谷の泉で、師の求めに応じて澄んだ水を汲むのが私の仕事である。

透き通った香りのこの深山の泉水は、師が立てる舶来の茶の湯に

最適なのだそうだ。そしてその茶をふるまわれるのは、十里の彼方にある長浜本城からの“お客人”が来る時と決まっていた。

「朝芽(あさめ)、聞いた？　今日のお客人はお武家様って噂よ」
社殿を出るとき、親友の水杖(みなづえ)が興奮した面持ちでささやいてきた。
「それも四人ですって！」
「四人も？」
「どんな方かしら。私たち、お目にとまれるかしら？」
愛らしい頬に手を当てて、水杖がうっとりとつぶやく。
私は、そんな親友のしぐさに思わず微笑みながらも言った。
「あまり期待しちゃだめよ、水杖。この社には五十名ものお旗女(はため)候補がいるのよ。お役をいただくには、まずはお師様のご推挙が必要だし……」
それに、と後の言葉を心でつぶやく。

私たちの一生がかかってくるのよ。

そう言う代わりに「行ってくるね」と声をかけ、少しショボンとした友の顔を気にしながらも、私はいつもの山道を歩き出したのだった。

長浜は、日の本有数の巨大な湖水に面した小国だ。気候は温暖、風土は豊かで、道行く人々の顔も明るい。湖から上がる新鮮な魚介類と肥沃な土地に実る農作物は、“万年豊作国”の名にふさわしい潤いを下々の生活にまでもたらしている。
豊かさの元はそれだけではない。
長浜国守護、土岐(とき)氏は代々名君の家柄で、現領主、土岐定照(さだてる)様もまた、仁愛の心根優れたお方よと、専らの評判だった。
自ら城を出ては農村に交わり、親しく治水や収穫の悩みを聞きと

っては年貢に反映させ、苦しむ民草を少しでも減らそうと奮闘されている。
また政治や軍学にも詳しく、おそばを固めるご家老衆も、みな、名うての逸材ばかりであった。

沃土に加えて京師（みやこ）に近い交易の要衝。近隣諸国がこれほど“おいしい領地”を見逃すはずはない。
小国であるのが更に食指をそそるのか、甲兵（こうへい）の波はこの名君の美しい国にも容赦なく押し寄せていた。国境付近では今もなお戦闘が続き、近隣国主の悪意をくんだ浪人たちが、夜盗や山賊となって街道の平和を脅かしていた。
しかし、長浜国はびくともしなかった。
肥沃な土地と名君に育てられ、代々続く優れた武人たちを将と仰ぎ、誇りと忠誠心を強く持った長浜軍は、すさまじく強かったのである。彼らは一丸となって愛する国土を守ろうと、押し寄せる世の波にあらがった。そして多くの戦場で、美談や武勇伝と共に勝鬨（かちどき）を上げた。
それは、今も続いていた。

昨年の秋、私は親友の水杖と共に故郷を出て、深山霊峰のふもとにある観滝社殿（みたきしゃでん）…武人お旗女養成所…に奉公に上がったのだった。
お旗女（はため）とは、長浜軍武将専属の侍女の総称で、軍営における武人たちの日常の世話をうけたまわる。勿論戦場にも同行し、本陣にて主のお世話をつききりで行うため、時には命を投げ出す覚悟も必要となる。そのため、お旗女と主の武人の間には、強い信頼関係がなによりも不可欠だった。
良き相性の主にお仕え出来るか、それが私たちお旗女の人生を決めると言っても過言ではない。
深山霊峰のふもとで日々の厳しい訓練に耐え、一通りの武術と儀式作法をたしなみ、一人前と認められると初めてお旗女候補として

名前が本城に送られる。その後は社殿の師のかたわら近く仕えながら、主となるべき運命の武人に選ばれる時を待つ日々だった。

私も、水杖も、すでに候補としての名乗りはすませていた。

どちらかが…運が良ければ両方が…いつ選ばれても不思議はない。覚悟はすでに決めていた。

だけど私は水杖ほど今日のご使者に関心を持つことができなかった。むしろ、客人がただの、いつものご城主様の時候のお使者であってほしいと願っていた。

私は、怖いのかもしれない。

「いやね、こんなことを考えるなんて」

我知らず思いを口に出し、ハッとあたりを見回す。誰もいない深山の崖道であることを思い出し、ほっと安堵の息をつく。

「さあ、早く戻らなくちゃ！」

気を取り直し、足を踏み出した私は、目的の泉の方を見て思わず息をのんだ。

誰かが水の中に入っている。

一目で武人だと解った。こがね色の胴巻鎧（どうまきよろい）に篠小手（しのごて）の軽装。歳は若い……私より少し上と言ったところか。青ざめた顔で水中を見つめ、そのままざぶざぶと泉の中へと入っていく。

入水自殺だ！

「あっ…だめ…っ！」

思わず叫んで、私は駈け出した。足元で砂が崩れて滑りそうになる。何度も転びかけては体を立てなおし、私は必死で崖を駆け降りた。

滑り込むようにして泉のほとりの砂地に駆け込み、甕（かめ）を…それで

もそっと下ろす理性はまだ残っていた…地面に寝かすと、泉の中に飛び込んで行く。

冷たい。

陽春とはいえ、深山の谷間にこうこうと湧き出る泉水は、足がちぎれるほどに冷たかった。

それでもためらう暇はなかった。見る間に腰、胸と上がる泉水を掻き分け、わらじに付いた埃で澄んだ水が濁るのもかまわず、彼方の人影に突進する。

泉の人影は止まらない。もう肩までの深さまで進んでいた。栗色の髪が顔の半分を隠すくらいにうつむいて、思いつめた様子で両腕を水の中に入れている。今にも顔をつけて沈んでしまいそうだ。私の全身に鳥肌が立った。

「死んじゃ駄目ぇーっっ！！」

夢中で叫びながら水面をたたく。深みにはまり、思うように足が進まない。

人影がはじかれたように顔を上げた……と思った瞬間、足が滑って、私は泉の中に倒れ込んだ。

バシャン！と派手な音が聞こえ、一気に視界が青くなる。頭の先までしびれるような冷たさだ。あわててもがくが、社衣が体中に巻きついてうまくいかない。溺れる、と思った瞬間、力強い腕が私の腰に回り、ぐいっと水の中から引き揚げてくれた。

「おいおい、大丈夫か！」

びっくりしたような声が聞こえた。激しくせき込む私の顔が水につからないように、たくましい腕がしっかりと支えてくれている。

私はそのまま抱えられるようにして、泉のほとりへと戻ってきた。

（2）

「あ…ありがとう、ございます」
殆ど引きずり上げられるようにして、泉のほとりの草地に這いあがった私は、喘ぎながら頭を下げた。
「苦しくないか。水は飲んでないか？」
肩で息をする私の側にしゃがみこんだ相手は、心配そうにのぞきこんだ。彫りの深い顔。すっと通った鼻筋。細身の長身、日に焼けているがきめ細かい素肌の持ち主で、一瞬はかなげな印象も受けるが、意志の強そうな顎の線や、鎧の上からも解る引き締まった体躯を持つ、堂々とした武人だった。
涼やかな瞳が、真っ向から私を見つめる。一度に頬が熱くなった。
「大丈夫です……」
「寒いだろ。何か着る物を……」
そう言って立ち上がった黄金色の鎧が、日の光に反射してきらりと光った。
そこからも途切れることなく泉水が滴り落ちている。
その瞬間、私はなぜ自分がこんなことになったのかを、鮮烈に思い出した。
「あっ、あのっ、」
あわてて後ろ姿に声をかける。
「お助け下さり、ありがとう存じまする。でも、あなた様が死んではなりません！　入水だけはおやめ下さい。私、あなたが水の中に入るのを見て、それで、つい……」
言葉が途切れる。
相手は、真ん丸な目をして振り向いていた。
「入水？　俺が…？」
「……違うの……？」
「……。」
沈黙……。

次の瞬間、若き武人は、腹を抱えて大爆笑した！！

はじけるように笑う相手を呆然と見つめる私の上に、突然大音声が降ってきた。

「コラァーッ凌介！！　いつまで水遊びしてんだお前はよぉッ！早く行かねぇと日が暮れちまわぁ！」

仰天して空を見上げると、はるか高い山肌の岩場に、今一人の武人が仁王立ちになってこちらを見下ろしているのが見えた。目の前の青年とは対照的な、深紅の戦服の、派手ないでたちの若者である。頭を振り立てて喚くたび、そこに豪快に巻かれた華やかな鉢金が、ぶんぶんと鮮やかな尾を引いている。

「おう！　影芳か！　すまん！」

叫び返した黄金色の鎧が、ハッとしたように私を見る。

「すまないが、これから主命で急ぐところがある。びしょぬれの君を置いていくのは気が引けるが…」

「大丈夫です。一人で帰れますから」

申し訳なさそうな相手の言葉をやんわりと遮る。これ以上心配をかけてはという思いもあった。

「そうか。気をつけてな」

私が微笑むと、青年も、笑顔になった。笑うととても魅力的な表情になる。思わず心臓が高く鳴った。

「あ、ちょっと待ってろ。」

言うや否や、彼は跳ね起きるように振り向くと、はるか高い人影に向かって大声で怒鳴った。

「影！　荷の中に単衣があっただろッ！　投げてくれッ！」

「なんだと！？　これは先方への土産にと備中殿が…」

「いいんだよ！　箪笥に着せるために持っていってもしょうがねえって！　早く寄越せ！」

渋々、といった感じで、美しい包みが投げ落とされる。器用にそ

れを受け取った若者は、私の元に駆けてくると、
「これ、着なよ」
そっと手渡してくれた。
戸惑う私ににっこり笑うと、そのまま踵(きびす)を返し、見る間に崖道を駆け上がっていく。重い鎧から雫が散るたび、黄金色の光が空に散った。その姿が美しいほど軽々と岩を伝って友人の元へ駆け上がると、二人はそのまま崖道にいた馬に飛び乗り、鮮やかな手綱さばきで駆け去って行った。

午後の斜陽を雲が遮り、谷間にさっと影がさした。私は急に一人になった寒々しさを感じながら、急いで体を起こした。凌介と呼ばれた黄金鎧の青年の笑顔が温かくよみがえり、また頬が熱くなる。
入水じゃなかった安堵もあった。じゃあなぜあのようなところに？　何をしていたの？　出来れば、理由も聞いてみたかったけど、それにしても、止めに入った私が逆に助けられたなんて、あまりに格好がつかないわ……。
取りとめのないことを思いながら、頂いた包みをそっと開くと、中にはとても美しい翡翠色の着物が入っていた。
思わず感嘆の声を上げる。すぐに手を通すと、まるで羽根のように軽く、ふんわりとした着心地が、春風のように暖かだった。

いつもの時刻より大幅に遅れて社殿に帰り着くと、門の前で親友の水杖(みなづえ)が、心配そうに迎えてくれた。
「いったいどこへ行っていたの？　心配したんだから！　お師様も気がかりそうにさっきまで覗いていらしたけど、ちょうど今お客人が来て…」
ああ、間に合わなかったのだ。これでも思いきり山道を駆け戻ってきたのだけれど。

社殿では、定められたものしか着衣が許されない。硬い社衣に着替え、髪を整えていたため遅くなってしまったのだ。
あの美しい翡翠の着物は、あたたかな思いと共に部屋の文机においてきた。凌介と呼ばれた青年の、屈託のない素敵な笑顔。私を抱え上げてくれた腕の力強さ。思い返すたびに、まだ頬が熱くなる。
主命によるお使いの途中と言っていた。あのもう一人の若者も同様、いずれ長浜軍の武人の一人だろう。私がお旗女として戦場に出る身ともなれば、いつかまた会うこともかなうのだろうか。
「ご泉水、間に合わずに申し訳なかったわ。お師様はお怒りかしら。」
沸き起こる思いを振り払うようにつぶやく。もう考えちゃいけない。もう思い出してはいけない。
二度と会うことはない。熱い思いを冷たくねじ伏せる。
「バカね、茶の湯よりも朝芽(あさめ)の方が大事に決まってるじゃない。無事帰ってきたと解れば笑って迎えてくださるわよ」
ほっとしたように笑う水杖の存在を、私はありがたく思った。この友がいなければ、そして厳しくも温かく見守ってくれている師の存在なくしては、とてもここまで苦しい修練の日々を切り抜けられなかったと思う。
その彼女が、不意に声をひそめた。
「それでね、来たわよ」
「え？」
「お武家さまが四人。」
「そう……」
「控え所は大騒ぎよ。一度に四人もお旗女(はため)に上がるのは、初めてですって。四人の中には、いかにも恐ろしげな髭の親父もいたっていうけど、構うものですか。ああ、いいわね。私も選ばれないかしら！」
水杖は、華やかな長浜のお城や、交易も盛んな城下町を訪れることに、常々憧れていた。城勤めともなれば、その思いもかなう。過

去には召された武人に可愛がられて、ついにその妻の座を射止めた幸運なお旗女もいたと言う。身寄りもなく、帰る家もない私たちにとって、新しい居場所を夢見るのはごく当然のことだろう。
そうは解っていても、私はやはり、心の臓をギュッと掴まれたような強張りをほどくことができなかった。
御指名から完全に外れるまでは…
「一緒に、いけるといいわね！」
水杖が、私の思いとは対照的な、屈託のない笑顔を向けてきたとき、澄んだ鐘の音が社殿に響き渡った。
「お召しだわ。決まったのよ！　さあ、早く大広間に行きましょう！」
水杖が興奮したように言って私の手を引き、美しく掃き清められた社殿の内庭を走りだした。

（3）

七十畳はあろうかと思われる広々とした大広間が、水を打ったように静まり返っていた。
五十名からの、お旗女候補の女性たちが、美しくそろって叩頭している。私も水杖も、緊張した面持ちのまま、低く頭を畳に下げて、運命が決まる瞬間を今か今かと待ち続けていた。
辺りはしわぶき一つ、衣擦れの音ひとつ聞こえない。ぴたり、と固まった静寂が、あたりを支配している。
庭でさえずる小鳥の声が、まるで切り離された世界から聞こえてくるようだ。
またひとつ、澄んだ音で鐘が鳴った。
その瞬間、ふすまが開いて、私たちの老師を先頭に、四人の厳めしい鎧姿の武人が入ってきた。もちろん顔を上げるわけにはいかな

いので、過去の経験からの推察である。
着座の気配。部屋の空気が、ピーンと張り詰める。
老師の、穏やかだがよく通る声がした。
「此度、守護職(しゅごしょく)土岐定照様のお達しにより、武人お旗女の選別の運びと相成った。ただいまより四名の名を申す。呼ばれた者は、迅(と)く、隣室へまいりませい。」
すぐ隣で、水杖がかすかに身じろぎした。彼女の緊張も最高潮に達している。
「水杖」
「ハイッ」
親友の絞り出すような声がした。
選ばれた。すごい。良かったね、水杖…！
思わずこみ上げるものを噛みしめた時、老師の声が厳しく呼んだ。
「朝芽」
ハイッ、と、反射的に声が出た。修練のたまものである。しかし私の魂は衝撃で消えそうになっていた。
選ばれた……？　私が……！？
「……以上四名。速やかに参れ」
老師の姿が消えると同時に、広間中にざわめきがわきおこった。緊張が一度に緩む中、私はうつむいたまま汗だくになって固まっていた。後の二人がだれだったのか、それすら頭に残っていない。
「行こう、朝芽！」
水杖が私の腕をつかむ。はしゃいでいるのかと思いきや、その顔は意外にも厳粛だった。いざ呼ばれ、任の重さを改めて実感したのかもしれない。私は茫然と、されるがままに立ち上がった。

「朝芽でございます。まかり越しました」
挨拶に答えて、老師の声が呼んだ。私はこわばる手を励ましながら、ふすまを開けた。作法通りに、下座に控える。水杖も、別の部

屋でどきどきしながら待っているはずだ。これから各々の部屋で、新しい主との対面が行われる。
老師は、窓辺に佇(たたず)んでいた。逆光で、表情はよく見えない。しかし、いつもと変わらぬ穏やかなそのたたずまいが、私の緊張を解きほぐし、心の震えを止めてくれた。
部屋には西日が差しこみ、窓の外には鮮やかな山の夕暮れが見えた。残照を受けて、山々が黄金色に燃えている。それは、昼間の青年の鎧から散った、金色の雫を思い出させた。烏がねぐらに帰っていく。奥の深い谷ではすでに、夜の帳を迎えていた。
半年をかけて見慣れてきたこの奥山の美しい景観も、今日が見おさめになる。お旗女に選ばれた者は、その主と共に速やかに社殿を出なければならない。これはもう、例外のない掟であった。
「朝芽。泉からは無事戻ったか。」
老師の声に私は小さく頷いた。親とも思いお仕えしてきたこの恩師とも、別れの時が近づいて来たのだ。不意に寂しさがこみあげて来る。
「今日まで、良く励んでくれた。此度の選では、真っ先にそなたの顔が浮かんでおった。そなたの主は、わしが選んだ。良き運命の出会いとならんことを祈っておる。……健やかにな。」
「お師様も……どうか、おからだ大事に……」
不意に感情があふれ出し、視界が涙でかすむ。老師は少し頷き、すっと姿勢をただすと静かに部屋を出て行った。
この瞬間、私は老師の元を離れ、長浜軍武将専属の正式なお旗女となったのである。

自分の主がどのような武人なのか、それは今は問題ではなかった。どんな未来が待っていようと、命をかけてお仕えする。それが私の運命なのだ。
心が引き締まる。今までの不安がうそのように消えていく。
私は新しい未来へ踏み出すその瞬間を、ただひたすら待ちうけて

いた。
ふすまが開いた。
いよいよ対面の時が来たのだ。
私はその場に膝をつき、主を迎える礼をとった。
「やあ、君が新しい侍女頭だね。よろしく頼む。」
声を聞いた瞬間、私は愕然と目を見開いた。
そこには、同じく目を丸くして絶句する、あの黄金色の鎧の青年が立っていたのだった。

〈続く〉

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1247ba/

---

長浜☆戦国時代

2012年1月3日01時03分発行